

▲ 研究室紹介

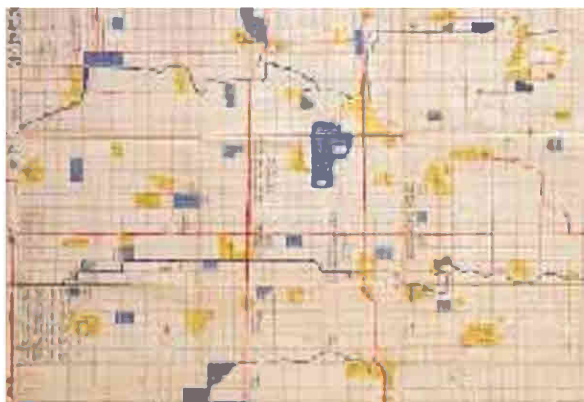
歴史研究室(文化遺産研究部)

奈文研発足当初に、南都諸寺社の文献史料部門、考古部門の調査研究を目的に設置された歴史研究室は、考古部門が1964年に分離して以降、定員1名と併任数名の体制で、南都の諸大寺や大社が所蔵する書跡資料の調査、研究を継続してきました。

そしてこのたび、奈文研の独立行政法人化に伴い、新しく設置された文化遺産研究部の1研究室(定員2名)となり、建造物研究室、遺跡研究室とともに、文化遺産についての総合的な調査研究をおこなうこととなりました。

世界遺産条約の文化遺産の定義には、書跡資料の類は含まれていませんが、我が国には、世界でも稀に古くからの書跡資料が数多く遺存しています。そこに、文化的知的財産としての文化遺産を、よりトータルにとらえる調査研究体制ができたことは大きな意義があるのではないのでしょうか。

歴史研究室は、歴史資料を主たる調査研究対象としておりますが、そのなかでも文字が書かれている資料を中心に、従来から継続的に調査してきました。南都、すなわち奈良には、東大寺をはじめ数多くの古くからの大寺があります。そこに所蔵されている



北浦定政関係資料 大和国坪割細見図 天理市北部付近)

古文書、古記録、経巻、聖教などの書跡資料の量は膨大なものです。歴史研究室では、それらの書跡資料について、現在寺院が所蔵されています現状をふまえて、整理し、番号を付け、ラベルを貼り、調書を取り、写真撮影する調査を行っています。そして、作成してきたちょう調書や、写真の焼き付けを使って、その成果として管理にも研究にも役立つ目録を作ったり、資料紹介を行ったりしています。調書の内容を、データベース化する情報処理の作業もを行っています。

調査方法は同じでも、調査をしている寺院は数多くあり、それぞれの寺院について、抱えている課題は違います。たとえば、興福寺では活字本の目録の第3冊目刊行、薬師寺では入力しているデータベースの整備公開、東大寺では国宝にまだ指定されていない文書の整理などが、現在取り組んでいる課題です。調査は、南都以外にも、依頼を受けて京都、滋賀などに出かけることもあります。

研究テーマとしては、資料に即した研究を目指して、室員が古文書の用紙の問題や、平城京や寺院の絵図についての研究などをおこなっています。

また奈文研には、1992年に子孫の方から、幕末の都城陵墓の研究者である北浦定政関係の資料が寄贈されました。定政は、平城京条坊復元図を最初に作り上げた人ですが、彼が条里や条坊を実地に踏査したときの調査日誌(野帳)や復元図などが含まれており、それら貴重な資料を紹介する予定です。

文化遺産そのものが、その本来的な場所として存在している奈良におかれた研究室としての認識をもとに、文化遺産の内実としての歴史資料の調査、実態把握と成果公表に今後つとめていきたいと考えています。